

「巻き込まれ親父の膠着」

作 藤次郎政秀

●プロローグ

白山亭のメニューはHGの淹れる“白山亭オリジナルコーヒー”と軽食の“白山亭サンドウィッチ”と数種類のケーキだけ：“白山亭オリジナルコーヒー”以外の“白山亭サンドウィッチ”は近所のパン屋で、また数種類のケーキは、商店街の洋菓子店から仕入れている状況：

IYの働き（IYは“視える人”なので、母屋のHGの曾祖母と祖母の霊が色々教えてくれる。作者注）により、昔の料理や菓子等のレシピや仕入れ伝票等が次々と発見されるが、HGやIYは料理が駄目で、主婦のTTや姪のHMと弟子のHYの3人がレシピを見ながら試作を重ねるが、上手くいかず、結局、親戚の駅前の洋食屋のシェフや洋菓子店のパティシエや和菓子店の職人やパン屋の店主に頼んで再現できた。それを見て、やはりプロの腕を持つシェフを雇う必要があるとHGは、以前フェリー埠頭での事件（「巻き込まれ親父の突入」参照）を機につくづく実感した。

そんな折、いつも道場や射撃場を借りている港町警察署の受付の女性警察官KTから隣の駅にある官舎の食堂で以前食事を作っていた調理人が出産を機に退職していることを知る。

更に料理人は白山亭の近所に住んでいて、現在シングルマザーで子供が保育園に通い出したのを機にこの近所で料理人として働ける場所が無いか探しているそうである。

HGはその話に興味を湧き、KTにその料理人を紹介してもらう事にした。

彼女はSYと言って、警察官舎の食堂で働いていた経歴の他に料理学校の講師の経歴や調理師免許の他に栄養士免許を持っている。HGは「そんな凄い経歴を持った人が近所に

居たなんて…」と驚いた。彼女が再就職できない理由は、保育園に通う子供が居るので、自宅があるこの近所に就職先を探しているためだった。

H GはS Yと話し合い、子供優先の条件を飲んで彼女を白山亭のシェフに雇った。

S YはH Gの曾祖母、祖母のレシピを忠実に再建した料理を忠実に復元してくれたので、白山亭の料理のレパートリーが増えた。

S Yが白山亭の厨房に立って料理人として働いてくれているが、子供が病弱なため、すぐ保育園からの呼び出し連絡で出て行き、そのまま子供を連れて帰宅してしまうので、厨房を留守にする事がしばしば起こった。

H Gはその対応として、S Yの勤務中はS Yの子供を母屋で預かる事にした。幸いS Yの子供は母屋に居るH Y達やK Mや白山亭でアルバイトしている姪のH Mとその看護師仲間ならびに同じくアルバイトの港町・港町水上両警察署の女性警察官達ならびに機動隊やB S A Tの女性隊員達に受け入れられ、可愛がられた。

それでも、保育園からの呼び出しが相次ぐので、S Yは午前中に調理の下ごしらえをして、後は電子レンジ等で過熱して盛り付ければ出せるまでの料理のみをメニューに載せていた。昔の白山亭を知る人からは「シェフを雇ったのなら、あの料理がまた食べてみたい」と言うリクエストに対応するためには、事前予約を取るなどの対応をした。

その事が料理人としてのS Yのプライドが許さなかったであろう…S YはH Gにあと2人の料理人を雇う事を進言した…それには、S Y自身の給与が下がっても文句は言わないと言う条件で…

H Gは経理担当のK MにS Yの話をしたら「S Yのおかげで白山亭の売り上げが上がったのは事実だし、S Yがそれほど言うのなら、その2人と面接して試用期間を決めて雇ってみれば」と言われた。

SYは、SHとSMと言う二人の女性を連れてきた、彼女達はSYの料教室時代の同僚で、それぞれ結婚して講師を辞めたが、SHは子供に手がかからなくなったし、SMは離婚して子供は父親に引き取られていると言う家庭の事情があるものの、料理人の仕事をしたい気持ちを持ち合わせていた。

HGはSYとKMを交えてSHとSMと面談し、3か月の試用期間の後にパートとして契約する事にした。

3人の連携は大変良く、お互いをカバーしあった。特に白山亭の夜のPub営業では昼間SYが作り置きしてくれた料理を出すだけだったが、SHとSMがサポートしてくれて夜のPub営業でも出来立ての料理が出せるようになった。

：3か月後、HGとKMは納得してSYの給与を下げることもなく、SHとSMに対して正式にパート契約を結んだ。

HGは「Pub営業を任せられるマスターを雇いたい…」と贅沢を言う様になった。

白山亭にあるボイラーについて、SKがその操作ならびにメンテナンスをしているが、やはり古い事もあり、部品交換の必要が生じた。HGの祖父HHが残してくれたボイラーのマニュアルには、交換部品の入手先である港のドックが記載しており、連絡をすると、製造元の工場では30年前は通常に生産していたが、現在は受注生産のみで価格が高くなっているのを知った。

HGとしては、白山亭を再開店させたばかりで借金まみれの状態…一応親戚の商店街会長に相談すると「金は貸すぞ、無論無利子・無担保で」と言われたが、借金が嵩むとHGの生きている内に返せなくなる…とはいえ、ボイラーが使えないのは死活問題であり、交換部品の調達に曾祖母の実家にあたる「A味噌醤油店」に同型のボイラーがあった事を思い出し、A味噌醤油店を訪ねて、ストックしていた交換部品を安く譲って貰った。

でも、このままだとまた問題があれば、その補修費用がかかる…そんな折、テレビの取材を受け、店のボイラーを紹介した所、Y海軍基地から問い合わせがあり、機関科の教師が是非学生達と見学したいと話が舞い込んできた。元々このボイラーはY海軍基地で当時建造中の駆逐艦に搭載されるものであり、建造途中で船体に設計上の欠陥が見つかり、駆逐艦自体の建造が取りやめになったので、行き場を失ったボイラーを曾祖母と曾祖母の実家が譲り受けたものだそうだと祖父から聞いていたので、HGはその申し出を受けた。

果たして、当日Y海軍基地の軍学校の機関科教師が学生を引き連れて見学に来た。ボイラー自体は当時の傑作と称された代物だそうで、現在はこのボイラーの改良型を使用しているのだそうだが、基本を学ぶのにはこのボイラーの方がシンプルで構造が分かり易いとの事。

機関科教師はHGに、ボイラーが傑作であったため、民間船舶にも数多く搭載されたと説明していた。それを聞いてHGは「だから、港の民間ドックでも部品が手に入ったんだ…」と思った。

見学が終わった後で、白山亭の2階で学生達と機関科教師に食事を提供している時にHGは思い切って機関科教師に交換部品の入手について訊ねてみた。

機関科教師が言うには、現在の民間船舶で使用しているボイラーは、まったく別の形式のボイラーで、白山亭で使用しているボイラーとその改良型と部品互換性がないとの事。でも、現在でもまれにこのボイラーを搭載している民間船舶がまだ就航しているので、部品は作っているが、HGが以前、交換部品の入手先である港のドックで聞いた様に受注生産になり、いずれは作られなくなるだろうと話をした。

困ったHGは機関科教師に、どうしたら今後手に入るかを訊ねた。すると、海軍ではまだこの型の改良型のボイラーを海軍工廠で製造していて、まだ軍艦に搭載しているし、交換部品も互換性があるので、海軍工廠に連絡をしたらどうかとのアドバイスを貰った。

機関科教師から海軍工廠に対する紹介状を貰い、連絡先を教えて貰ったH GはA味噌醤油店の社長に話をする、A味噌醤油店の先々代の社長の弟がY海軍基地の軍学校の機関科の学部長という縁から、Y海軍基地の海軍工廠との話を通じ、交換部品が安価で入手出来ることになった。その代わりに、Y海軍基地の軍学校の機関科の見学や実習を受け入れることになったが、H Gは部品を安く譲って貰えるのと、ボイラーの実習に来る学生に将来S Kの助手や弟子になる人物が出てくるかもしれないと考えた。

● I A

I Fが白山亭に来た：一人の女性を連れて：

「ねえ、H G。この子雇ってくれない？」

H GがI Fの後ろに居る女性を見ると、I Aだった。I AはI Yと同期で、H Gが新兵教育・訓練をしたが、その同期中でもあまり目立った能力がなかったような：

「おい、F子ちゃん！うちは民兵会社D Kの日和見保身内密主義の上層部の被害者の会でもなきや、その保護施設じゃねえぞ」

H Gはけんもほろろに突き放す。

「そんなこと、言わないでよ」

I Aは事務方のリーダーである日和見保身内密主義の上層部のお局にあらぬ疑いをもたらして、会社に居ずらくなって辞めたとの事。

「…また、あいつか！」

H Gは唾棄するように言った。H Gが以前会社で事務方の仕事をしていた時、H Gの部下でB Yと言う女性が居た。B Yは頭がよく…ある意味ずるがしこい…H Gに頼るような方法で逆にH Gを使うが、H G本人はB Yに使われている気がしなかった。

ある些細な出来事がきっかけで、日和見保身内密主義の上層部のお局の標的となり、以後

何かにつけB Yに因縁をつけたり、態度悪く接したため、B Yは社内に居づらくなり、退職してしまった…HGにとってはB Yの件は日和見保身内密主義の上層部のお局の犠牲者として身近な例であったが、I Fを初め、他の部隊や部署で同様な事例は山ほどあった…

「じゃ、I A入門試験だ」

「はい」

H GはH Y・T Y・I YとI A、それからI Fを連れて港町警察署の道場に行った。

4人を道着に着替えさせると、

「H Y」

「はい」

「I Aと体術（こちらの世界で言う柔術のようなもの）で組んでみ」

「はい、H Y先輩。よろしくお願いします」

「始め！」

とH Gが合図をすると、H Gの肩を誰かが叩いた。

「はい？」

H Gが振り返ると、知り合いの警部が

「あの子…H Yと組ませたら…」

と言っている時に、「ヤー！」と言う声が聞こえたので、H Gが慌てて振り向くと、I AがH Yに投げられていた。

「そっ、そこまで！」

H Gが止める。I Aは投げられて肘をついて立ち上がろうとしていて、H Yは腰に手を当てて「フンス！」と鼻息をしていた。

「…いや、H Yさん…段取ったばかり…と言おうとしたんだけどね…」

警部は、苦笑いをして言った。

「次、I Y」

「ハイ」

「I Aと組手（こちらの世界でいう空手のようなもの）で手合わせしてみ」

「はい、I Yヨロシク」

「始め！」

これも、一瞬でI Yのハイキックをよけきれず受けてしまい、転倒したところをI Yの拳で急所を寸止めで突かれて終了

「次、T Y」

「はい」

「I Aと剣術（こちらの世界でいう剣道・棒術等の得物を使うもの）で合わせてみ」

「はい、T Y先輩。お願いします」

「始め！」

これも、T Yにいきなり頭上に木刀が撃ち込まれ、I Aはよけきれずに転倒した。T Yは体術ではH Y、I Yに劣るが、得物を持つと二人を凌駕する。

「そこまで！」

「最後は射撃」

とH Gは言うど、5人を警察署の射撃場に連れて行き、

「I A、この中で好きな拳銃を選んでいいよ…みな俺がチューンしたモノだ。試射して調整したら、始めよう」

と言って、H Gはトランクを開けると、数丁の拳銃が入っていた。I Aはそこから2丁選んでH Gから拳銃弾を受け取り、試射をした。

「これでいいです」

I Aは2丁の内から1丁選んだ。

「では、娘ども（H Y、T Y、I Yの事）お前たちも準備して…F子ちゃんもやる？弾は奢るよ」

と言って、H GはI Fに拳銃を勧めた。I Fは「そうね…」と言って、普段自分が民兵会社の任務で使用しているのと同型の拳銃を選んで、シューティングレンジに立った。

「では、各自弾は5発（拳銃によって異なるが、シングルカラムのマガジンで5, 6発）でその成績で決める…では始め」

各自、思い思いのタイミングで射撃を始める。

H Gは後ろから黙って見ていた。

結果は、H Y、I Y、I F、T Yが僅差…I Aは一発的から外した。

碇屋に戻り、

「全然ダメじゃん」

H Gは呆れた。

「履歴書ある？」

「はい、これに…」

と言って、I AはH Gに履歴書を渡す。H GがI Aの履歴書を見て

「あれ？I Aお前大特（大型特殊車両）と大型2種（旅客用バス）…それに小型2種（旅客用普通自動車）持ってたんだ…」

「はい、民兵会社の業務で大型トラック等の車両を運転するのに必要だと思って免許取りました」

「…うーん」

H Gは悩んだ。体術ならびに組手、射撃はダメダメだが、これだけ車両の運転免許を持っている人材は滅多に居ない…さて、どうするか…

悩んでいるH GにT Yが

「あのう…よければ、私の下で営業として雇ってもらえませんか？」

「お前の下で営業？」

「はい、私も最近営業と現場との掛け持ちで忙しいので、この子（I A）は私が鍛えます」

「そうか…めんどくせー…が、T Yがそこまで言うのなら、T Yの弟子として入門（いつの間に…作者）を許す」

「はい、ありがとうございます」

●H YとH Gの夫婦漫才

母屋の自室でI Aの履歴書を見ながら唸るH G…そこにお茶を持ってきたH Yが

「准尉！また、弟子を増やして…わたし達に断りもなく（…いや、知っていますが、H Yの言いがかりです（笑）。作者）」

「なんで俺が弟子を増やすのに、一々お前らに断らなくてはならないんだ？」

「それはですね…弟子を増やすと、食費とか光熱費とか食事の当番割や風呂やトイレの清掃の当番割とか色々増えます」

と言って、H Yはむくれた。

「H Y、そこに座りなさい！」

「もう、座ってますけど…」

H Yはちやぶ台を前にして、座布団に座っていた。

「ウグっ！…お前何時から俺の女房になったんだ？」

H Gが呆れた顔で尋ねると

「…それはまだですけど、こうも准尉が身勝手な振る舞われると…じゃ、食費や光熱費の見積もりはできているのですか？」

とシレっとH Yが言うと、H Gは凶星を突かれ、

「今、やろーと思っただのに、言うんだもんなー！」

「ほら、見なさい…そんなんだから、わたし達が苦勞するんです！」

と言って、H Yはちやぶ台を叩く

「なんだとー」

と言って、H GはH Yが持ってきたお茶の乗ったちやぶ台に手をかけると

「やめてください！お腹の子に罪はありません！」

とH Yが言ったところで、隣室の客間の一つを経理の執務室にしているK Mが勢いよく襖をパーン！と、あけ放ち、また居間からI YとH Mが顔を出す。

「こら！H G…お前とうとうH Yに手を出したなー」

と怒りの表情で言うと、H Yが

「スミマセン！夫婦漫才のノリで…つい…ゴメンナサイ！！」

と平謝りすると、拍子抜けしたK Mが

「…なんだ…漫才か…、まったく脅かさないでよ！」

と言って、部屋に戻る。I YとH Mは「やれやれ…」と首を振った。

● I A 覚醒

I Aが弟子入りして半月が経つ。その間彼女の運転免許のお陰で白山亭と碇屋の機動性

は向上した。(今まで、HGがトラックを運転していた。SKは左足を戦闘で負傷して不自由なため、AT車両のトラックしか運転できない)

また、TYについて行つて営業活動をしているので、そろそろ知り合いの警察や機動隊ならびにBSATとかY市銃砲試験場とか葛葉組とかはもとより、民間射撃場の銃器のメンテナンスや新型銃器のカタログセールス位は一人で行かせようかとHGはTYに提案しようと思っている。とはいえ、IAもTYの弟子として碇屋に入つたので、体術・射撃の腕の向上は必要。

体術面では、HY達に鍛えられているが、まだまだ…

ガンスミスの腕前は、SKによると機械の扱いはうまいとの事…これは、盲点だった。

今日は射撃の訓練と言う事で、HGの指導の元(IAはまだ〃特別銃器携帯・使用許可証〃を持っていない)、港町警察署の射撃場で訓練を始めた。

IAは自らガンスミスの工場で調整した拳銃を構える。

結果、5発撃つて2発完全的から外した。

「余計下手になっているような…」

と言って、HGはIAの調整した拳銃を撃つと、命中率は良いが、なぜか左にずれている…

「……」

再度IAに撃つよう指示をして、今度は後ろからではなく、横から姿勢を見る。

姿勢は基本通りに撃っているし、引き金を引く時のブレは見られない。弾丸発射時のリコイルも大きくない…それでも、5発に1, 2発は完全に的を外す。

「……」

HGは的を外した弾丸の行方に注視した。的を外した弾丸はこちらから見て明らかに右側の右側…

「……」

「I A」

「はい」

「こっち来て、ちょっとこれをもって、俺に向けて狙いを付けて見ろ」

と言って、H Gはシリンダーを外したリボルバー拳銃を渡した。I AはH Gに銃口を向けるのを躊躇ったが、H Gが「構えて」と言うと、仕方なくH Gの顔に向けて銃を構えた。それを見たH G、「あつ」と言った。H Gから見て右手で構えた拳銃のフロントサイトとリアサイトをI Aの右目に合っているが、右目より左目が大きく開いている。普通なら、右目が大きく開くはずである。

多分、今まで右利きで生活していたため、利き目も右だろうと自身で矯正しているようだ。

「I A」

「はい」

「お前、左目でウイंकできる?」

「ええええ…」

I Aはなぜか照れた。H Gは呆れて

「そーじゃなくて、左目だけ瞑れるか?」

「えーと、やってみます」

と言って、I Aは左目を瞑ってみせた。

「それでもう一度構えて」

「…こうですか?」

と言って、構えたI Aの右目と構えた拳銃のフロントサイトとリアサイトは完全に左にずれていた。それを見てH Gは確信した。

「はい、ありがとう」

「…いえ、なにか分かりましたか?」

「I A、お前利き目左なんじゃないの？」

「エッ？」

「カメラ…この場合、スマートフォンやデジタルカメラみたいに本体の画面で被写体を確認して撮るんじゃないで、本格的な一眼レフカメラとかだけど…それで今まで不自由したことない？」

「…そうですね、確かにそういったカメラだと、撮影した時に何故か右側の友達が半分切れている事がありますね」

「やっぱり！」

「なぜですか？」

「俺のお袋がそうだね」

「じゃ、これを右目にして」

と言って、H GはアイパッチをI Aに渡して付けさせた。

「…なんで、こんなもの（アイパッチ）持ってるんですか？」

「俺の利き目の右目が使えなくなった時の訓練用…」

「そーですか…」

「そのまま、右手で拳銃を構えて…」

「こうですか…サイトが見えませんが…」

「サイトを左目で合わせてごらん」

「はい」

I AはH Gに言われるまま構えた。H Gは「フム」と言うと、「そのまま」と言って、拳銃を構えるI Aの周囲を見て回りながら、体の向きとか腕の伸ばし方について指導した。

「まあ、こんな感じかな… I A、姿勢で苦しいところはないか？」

「はい、腕の位置に若干違和感ありますが、大丈夫です」

「それは、慣れるしかないな。よし、その姿勢を覚えて、シューティングレンジに立って取り敢えず撃つてごらん」

「はい」

I Aは自分の拳銃を構えた。そしてたどたどしく発砲した。結果は、的の中心を外しているものの、全弾的に当てていた。

「あれ？」

撃つた的を見て、I A自身が驚いていた。それを見ていたH G

「これで、命中精度は向上したし、お前の癖が分かったし…後はその撃ち方をマスターするように練習する事だね」

「ハイ！」

「では、後その銃のリアサイトを調整してから試射して、的に近づいたら今日の訓練は終了としよう」

「ハイ！！」

I Aの弾む返事にH Gは「（これで、I Aの銃の腕は向上するだろう…しかし、I Y同様の拳銃の排莢口を選ばないといけないなあ…そうか、これからの射撃訓練はI Yを同行させるか…あれ？I Yは左利きだけど左右どっちの目で狙いをつけていたっけ？（左目です。作者）」と考えてしまった。

●H Yの告白

ある日、港町警察署から警官が白山亭に来た。応対するH GにH Yに行方不明の搜索願が出されていると言う事が告げられる。

訳の分からないH G、T Tに事情を話してその晩T Tにわざわざ残ってもらい、H Yと白山亭の2階で話をすることにした。

「H Y」

「はい」

「昼間、港町警察署の人が来てな、お前さんに搜索願が出ているというんだ…」

それを聞いてH Yは項垂れた。

「俺はてつきり、お前さんがここに居ることを、ご両親が承知していると思っていたのだが…どうやらそうではないようだね」

H GはF県領地から戻ってきた当初、I Yが退職届を会社に出して手続きを行っている間に喫茶店でH Yに自分についてきた理由を詰問していたが、H Yは「I Yが心配だからついてきた」の1点張りでも何も自分の事を話さないことを思い出していた。H Yは意外と頑なところがあるので、この場でもそれで終わるかもしれないと思った。なので、今回はT Tに同席をお願いした。

こちらにH Yが来て2年…その間にT TにH Yがなにか話をしていないかと訊ねたが、T TはH Yが何かを隠している事は分かるのだが、それが何かは本人が話したがらないとの事。

暫く沈黙が続いたが、その沈黙を破ったのは当のH Yであった。

「わたし…どうしても逃げられない過去と環境があつて…そこから誰か救い出してくれるのをただ願つていて…そうして40歳を越してしまいました。F県領地の事件の後、I Yが准尉について行くと聞いて…『わたしは…?』と考えたのです。そして、わたしはただ救い出してくれる人を待つのではなく、救ってくれる人について行くのが大事であると気づきました」

「その、『どうしても逃げられない過去と環境』について、差支えの無い範囲で話してくれないか？」

とH Gが言うと、H Yは一瞬ビクツとなった。

「無理に話さなくてもいいのよ」

T TがH Yの肩に手を添える。H YはT Tを見上げると勇気を出し

【わたし…わたし少女の頃から義父と義兄に犯されていたんです！】

H Yその小柄の身体から振り絞るように言った。

その衝撃の告白にT TはH Yの肩から手を放し、口を覆い、H Gは愕然とした表情をした。

H Yは更に続けた。

「私の家は、わたしが幼い頃に実の父と死別してわたしは母に育てられました。私が中学生の頃に、母は今の義父と再婚して、義兄ができました。今まで母が苦勞してわたしを育ててくれたので、義父が出来て幸せな家庭になったと思いましたが、義父兄の異常な性癖は見抜けませんでした。わたしが中学生の時、生理痛が重くて学校を休んでいるとき、店の（H Gの実家は書店）空き時間を利用して部屋に入って来た義父に強姦されました…わたしが母に話をする大変な事になると脅され、関係をつづけました。ある時、義父との関係を義兄に見られてしまい、それを脅迫されて義兄とも…それも、大学に入る前まで…わたしは何度も母に打ち明けようとしたが、母の幸せそうな顔を見るたび、できなくて…」

H Yの苦悶の表情の目に涙が浮かぶ…

「大学に入ったのを機に家を飛び出しました。そして大学を卒業し、徴兵制度でどこか遠くの軍駐屯地に行く事を望みましたが、私の卒業する前年に徴兵制が廃止され、困った挙句帝都にある民兵会社（H Gが居た会社）に入社しました。それから退職するまでは准尉もご存じだと思います」

涙が自然に流れだしても、H Yはぬぐう事をせずに話を続けた。

「退職後、しばらくフラフラしていましたが、義兄が結婚したというので、呼び戻され、実家に帰りました。そのうち、義兄夫婦に子供が生まれましたが、義兄夫婦と一緒に暮らしていると、わたしには義兄夫婦と子供がおぞましく思えて…精神疾患になり、精神病院に通院していました…それもつい最近…F県領地の事件直前まで」

H Yは涙ながらに話した。

「つい最近…」

T TはH Y言葉の端を繰り返した。

それを聞いて、H Gは「H Yが低身長で童顔なのはそのせいではないのか…」と思った。

H Yは涙をぬぐうと、更に

「あの日…F県領地に出かけたのは、義兄夫婦の子供に収穫祭のプレゼントを買うのを口実に実家を飛び出して来たのです。そこで、T Tと准尉と再会して、これは何かの運命かと思いました。そして、准尉達と作戦に参加している間は、わたしは本来の自分を取り戻したと感じています。そして、事件が解決し、『また、不毛な日常に…』と考える、気分が落ち込みかけていた時、I Yが会社を退職して准尉について行くと言い出したので、彼女の勇気にわたしも触発されて准尉について行くことにしました。その後、准尉がわたしとI Yの肝試し…と言いましようか、この店（白山亭）の話を聞いた時に、I YとI Yの実家の話を聞いて、I Yとわたしは境遇こそ違え、I Yは親から捨てられ、わたしは家を捨てたくて…二人とも内心死にたいと言う気持ちは同じで…その一方、誰かに救って欲しい…と強く願っているのです。その時、わたし達を救ってくれるだろう人が現れました…それが准尉だったのです。准尉は最初わたしを実家に何とか帰そうとしました。I Yを見ていて、昔のわたしがI Yみたいに素直に感情に従っていたら、会社を辞めても准尉の傍に居ただろうなあ…と。あの頃は家の事を隠して引きずっていましたので…」

「…それが、お前さんが俺についてここに来た本来の理由か…」

「はい…」

「…よく話してくれたわね…ありがとうH Y」

と言って、T TがH Yを優しく抱きしめると、H Yは大声で子供の様に泣いた。

●親と子

数日後、警察官に連れられて一組の夫婦が来る。それがH Yの両親だという。

H Gは白山亭2階に案内した。

「始めまして、当店のオーナー兼エージェント会社社長のH Gです」

「始めまして、H Yの父です」

義父はやや喧嘩腰の口調で挨拶した。

「母です初めまして」

母親はオドオドして暗く静かに挨拶した。

「どうぞ、おかけください」

3人は座ると、T Tがコーヒーを持って上がってきた。そして、T TもH Gの横に座った。

H Gは「えっ？」と驚くが、T Tが「私も聞く権利があるわ」と言ったので、同席を許した。

H Yの両親はT Tの事をH Gの妻だと思っていた。

「わざわざS県領地からお越しいただき、誠にご苦勞様です」

H Gが切り出すと、H Yの両親は驚いた。両親は娘が出身地を黙っていると思っていた。

「娘から聞いたのですか？ 私達がS県領地に居ることを？」

「いえいえ、彼女は私の元居た民兵会社での教え子でしたので」

「…と言う事は、娘の事は？」

「はい、彼女が前に居た民兵会社で新入社員の頃から知っています」

「…そうだったんですね。あなたが、娘が話していた『父親のような教官』ですか…」

母親の表情が明るくなった。

「ハハ、彼女が私の事をどう呼んでいるか知りませんが、私の教え子からは『親父』とか、『パパ』と陰で呼ばれているようです」

そして、H Gは居住まいを正すと、

「この度は、私の落ち度をお詫びします。お嬢さんがまさか家出をして私の所に居るとは思っていませんでした…昨日、彼女からすべて話を聞かせていただきました」

と言って、H Gは深く頭を下げた。T TもH G同様頭を下げる。それを聞いていたH Yの義父の顔が一瞬曇った。

「あの、ご両親はお嬢さんがここに居ることをどこでお知りにな？」

T Tが聞くと、H Yの母親は

「娘の事は半年前のY国際港のフェリー埠頭での事件についての特集がニュースで報じられた際に、その中に娘の姿がテレビの画面に写っているのを見て知りました。それで娘が騙されて危険な仕事をしているのではないかと思い、連れ戻しに来ました」

「成程…お嬢さんが私に騙されて危険な仕事をしていると思ったんですね。それは心配するのとはごもつともです」

H GはH Yの母親の言葉を一部繰り返して、H Yの両親が、娘が危険な仕事をしていて心配だと言うことを強調した。

「私はお嬢さんが、私達の仕事について理解した上で、自ら進んでここで働いてくれています。しかしながら、ご両親の理解を得られない今、私のできることはお嬢さんをお返す事だけです。今から彼女を連れて来ます」

「ちよつ…ちよつと、じゅ…いや、H G！」

T Tは慌ててH Gを呼び止めるが、H Gは構わず部屋を後にした。

H Gが1階のフロアに行くと、女給姿のH Yがバーカウンターの席にポツンと座っていた。H GはH Yの隣に座り、

「H Y…お前さんのご両親は、お前がここで危険な仕事をしているのが心配で迎えに来たのだそうだ…」

「わたしは嫌です！ 帰りたくありません！！」

H YはH Gにしがみついて泣き出した。H GはH Yの頭を撫でて

「そう言うと思った…昨日の話を聞くと余計ね…でも、お前さんは俺に嘘をついていたね」

「そつ…それは…」

H YはH Gから身を話してH Gの顔を見た…普段なら上目遣いで見るのであるが、珍しく真っ直ぐに見る…その瞳には哀願の色がハッキリ見えていた。しかし、H Gは心を鬼にして

「今、俺ができることはお前さんをご両親に引き渡す事だけだ…この先、ここで俺達と仕事をしたいのなら、ご両親ときちんと話し合って、決着をつけろ！ そして自立してこっちに帰ってこい！！」

とH Gは言って、H Yを突き放した。

嫌がるH Yを引っ張るように白山亭の2階に連れてきて、両親に合わせた。

部屋に入ると、H GはH Yの義父の顔色が悪くなっている事を見逃さなかった。

一旦、H GとT Tは席を外し、H Yと両親が話し合いをする場を設けた。

「おいT T、お前さん俺が席を外している間に、なにかご両親に言ったのか？」

「はい、あの後トイレに行くお母さんを案内する途中で、『HYはお義父さんとお義兄さんから少女期に性的被害を受けていて、それがトラウマになっていて男性不審になっていいます』と正直に話しました。その後先に席に戻り、お義父さんには『嬢さんは、あなたの元に帰るのを大変嫌がっていますが、なにか心当たりでも？』と話して、内省を促しました」

「…ド直球だな、それで反応は？」

H Gが眉をしかめて言うのと、

「お母さんは、大変驚いていました『奥様、それは本当ですか？』って…お義父さんは私の話を聞いて無言になりました…きゃー、奥様だって…私」

T Tの反応に「(どこまで本気?)」とH Gは複雑な気分になった。

「本当は、その役目…俺がするはずだったんだが…代わりに話してくれてありがとうT T」
「どういたしました…」

T TはH Gの両肩に手を置いて俯いた…T Tも無理してくれたとH Gは感謝した。

「今度、I Yの話についても教えて下さい…」

T TはH Gに言った。T Tは昨日のHYが『I Yもわたしと似たようなもの』と言ったのでI Y身の上も心配になっていた。

「ああ…I Yに直接聞くがいい…彼女は自分の身の上については包み隠さず正直に話してくれるよ」

それを聞いて、T Tは身を起こし

「そうなんですか？」

H GはT Tの言葉に頷くと、

「HYはI Yの身の上話を聞いて、自分と似ていると感じたらしいが、I Yは自分の境遇に

については、現在は隠すつもりはないらしい…少なくとも俺とH Yにだけかもしれないが…
ま、『死にたい』という願望は、F 県領地の事件で俺が解消させた」

「准尉…あなたって人は…」

やがてドアが開き、H Yが「お待たせしました…」と酷く沈んだ声で言った。

H GとT Tが入ると、H Yは

「ここで話すだけでは、埒があきません…一度実家に両親と共に帰ります」

なんか棒読みのような話し方であるが、彼女はそれなりに両親に話をしたのであるが、堂々巡りで話し合いに決着がつかなかったのであろう…

搜索願が出ている以上、ここ（白山亭）には置いておけないと言う事で、H GはH Yを両親に引き渡す。H Yは泣く泣く両親に連れられて実家に帰った。

●H YとI Y

H Yが両親と実家に帰る前日の晩、同室のI YがH Yの様子がおかしいと気づき、

「H Y先輩」

「なに？」

「昨日から、H Y先輩の様子がおかしいので…准尉やT Tさんに聞いても教えてくれなくて…」

「…その事ね…准尉もT Tもわたしに気を使ってくれてるんだ…」

「？」

「わたしね、明日実家に帰る事になったの…」

「えっ？」

「……（母屋）に来た時の事、覚えてる？」

「はい…准尉の肝試しの事ですか？」

「(笑)それもあつたわね…風呂屋での話(「巻き込まれ親父の鎮魂」参照)よ…I Yあなた、わたしがここに来たのはあなたを氣遣つて来たと思つてくれたじゃない」

「はい…あの時私は初めてH Y先輩の准尉に対する思いを知りました」

「そうよ…わたしもあなたに負けず、准尉を慕っているわ…今でもね」

「はい、そうですね」

「でも、今のわたしはあなたと違う」

「？」

「あなたは、家を出て一人で考えてF県領地で准尉に弟子入り志願したけど、私にはS県領地に親がいて、黙つて准尉に付いてきちゃつた…今その罰が当たつたの」

「？」

「わたしにその親から搜索願が出ているんだって…それで港町警察署が私の両親を連れてここに来たの」

「搜索願？」

「F県領地の事件に巻き込まれて失踪したことになっていのよ…わたし」

H Yは涙を流し始めた。

「…そのために…そのために准尉にご迷惑をおかけしてしまったの！」

と言つて、H YはI Yにしがみつく

「H Y先輩…」

I Yはどうする事も出来ず、ただI Yすがりついて涙するH Yにされるがままだった。

「I Y…あなた、准尉とここ母屋に入る前に駅前洋食屋でI Yの実家の事を話してくれ
たわね」

「はい…お恥ずかしい話ですが…」

「わたしは、あなたがキチンと自分の事を話せたのが羨ましかった…」

「？」

「わたしは、あなたの身の上が複雑で、それでも今の自分を受け入れているあなたが羨ましいの」

「はい…」

「わたしはね…わたしの家の話をする、恥ずかしくて言えない状況が少女の時代から続いていてね…」

「…」

「それが言えなかったので、長い事色々なモノが溜まっていたの！」

HYの言葉の口調が段々強くなってきたので、IYは「これはただ事ではないな!」と感じて、

「…ちよっと、HY先輩…無理しないで」

HYはIYに対して、目を見据えると、

「いえ…IYあなただから聞いて頂戴!…これは、准尉とTTにも話したけど…わたしが実家に帰ったら、准尉の元に残るのはあなただけだから…同じ准尉の弟子としてまた先輩としてあなたに打ち明けるわ」

HYはIYに、HGとTTに話したことを話した。

それを聞いたIYは自然に涙が溢れた…

「HY先輩…そんなに傷ついて居たなんて…今まで先輩は私が准尉に弟子入りするのが羨ましいだけではないと薄々感じていましたが、そのような過去があったなんて…それに対して私の家庭の事情なんて…」

HYとIYは抱き合って暫く泣いていた。

涙が枯れると、H Yは凜として、

「I Y」

「はい」

「わたしは明日実家に帰るけど、絶対ここに帰ってきてやるんだから！」

と力強く宣言した。I YもH Yを鼓舞するように

「ハイ！」

と返事をした。

「それまでは、准尉の事お願いね…」

「はい…それまでは私が准尉を独り占めします。H Y先輩…ご実家でごゆつくり…」

とI YがH Yに対してからかうように言うと、

「エー、それはヤダ！酷い事言うのねI Y」

とH Yも応じた。I YはH Yに対して真顔になり、

「だったら、早く帰ってきてください」

「うん」

●I YとT T

H Yが実家に帰った後、

「なんか…急に静かになったわね」

T Tがバーカウンターに寄りかかっているI Yに対して言った。

「そうですね…なんか寂しいですね」

「…あなた、H Yから話を聞いたのね」

「はい…流石T Tさん…気づきましたか？」

「だって、H Yが急に居なくなっただけを私や准尉に聞かないじゃない…普段のあなたな

ら、きつと取り乱して准尉に食って掛かったんじゃないの？」

「ハハハ…」

I YはT Tに凶星を突かれ、苦笑いをした。

「H Yは、あなたも自分と似ていると言っていたわ…あなたは どう思う？」

「私は…H Y先輩と比較するとしても…程遠いです。私は、B侯爵家の庶子の娘であって、大学卒業後に家を出されただけで…とてもとても…」

T TはI Yの言葉を聞いて

「…あなた…貴族の出？」

「はい、ですが今言った通り、庶子ですから…」

「そうだったのね、あなたは家を出され、H Yは家に縛られて…どこが似ているのやら…」

T Tは首を傾げる。

「…それは、きつと私とH Y先輩は『死にたい』と思っているのと同時に、『誰か私を救って！』と言う心の叫びがあつて、それが准尉に出会う事で、目の前に救ってくれる人が現れ、その人に縋りついたことが同じだと」

「…なるほどね…准尉に私があなたの事について教えてくれるように話をしたら、『I Yに直接聞けば、話してくれる』と仰っていたのはホントなのね」

「そうでしたか…もつとも、私の『死にたい』と言う願望は、准尉がF県領地の事件の『赤ずきんちゃん作戦』（『巻き込まれ親父の撤退』参照）で見事に解消されましたが…」

I Yは自虐的に笑うと、

「あの時ね…そんな事があつたのね…あなたと准尉には…」

T TはI Yの当時の事を思い出した。

「はい…その代償として、私は准尉の愛銃にシエリー酒をかけて動作不能にしまい、准尉の背広を汚してしまいました…その償いとして准尉のお手伝いをするべく命令を無視し

てF県領地に再上陸して、准尉に従ってきました（「巻き込まれ親父の反撃」参照）。その結果、得るものが大きく、もつと准尉の元で教えを乞いたいのと、お役に立ちたいと考えて、弟子入りに押しかけました（笑）」

「そうだったわね（笑）」

「ここ（白山亭）に初めて訪れた時に、女給姿のHYと再会してビックリしたわ…なんでHYがここに居るの？…って」

「ああ…TTさんがTY先輩を連れて来た時ですか」

「そう…あの時」

「私は前からTTさんに聞こうと思っていましたが、准尉とTTさんの関係って…」

「あら…知らないの？私准尉の御嫁さん候補だったのよ！」

「えっ？」

驚いて、硬直するIYに

「あらー、こんな話…話半分に聞いていいわよ。私が会社（民兵会社DK）に中途入社した時に、私の事を見た取締役や顧問達が、なにやら画策したみたいだけど…それは当初は私も准尉もまんざらではなかったけど…結局、私の姉達の旦那より年上の旦那様と言うのはねえ…だから自然に破局して、私は今の旦那と結婚退職して、准尉にはIF隊長と言う彼女ができたのよ…准尉とIF隊長については、もし結婚する様な事になったら、社長自ら仲人を買って出る気でいたみたい…人づてに聞いた話だけど」

「なんですと？」

IYは目をむいて驚いた。

「アハハ！…だから話半分に聞いていいのよ！これはおねーさんからの与太話！」

と笑ったT TにI Yは「どこまで真実??」と混乱した。

「准尉がF県領地の事件で私を傍に置いたのは、あの日私の母が入院先から一時帰宅を許されて、実家で姉達と久々に揃って会いましょうって時に、事件に巻き込まれて…准尉は私を何とかして無事に母と姉達に会わせようと画策して、二人でF県領地を歩き回って…挙句にH Yとあなた達に出会って、准尉は、とにかく私もあなた達もなんとか無事に安全圏に逃げようと色々考えてくれた結果、私は無事に家に帰って、旦那と子供に会う事ができたわ…昔の事もあったけど、あの時の事を恩に感じて、私もあなたみたいに准尉の所で働くことにしたのよ…でも、准尉は私の事をあなた達のお姉さん役にしたけどね」

「…」

● I YとH G

港町警察署道場。H Yが居なくなっただので、I YはH Gと組手の稽古をしていた。その帰り道、I YがH Gに

「准尉」

「なんだ？」

H GはI Yを見ずに歩いていた。

「弟子が私一人になりましたが…」

I YはH Gを覗き込むように言うと、

「一人？他にT YとI Aがまだ居るが…」

と言って、H Gは顎に手を当てて首を傾げた。

「いえ、すべてをなげうつて弟子入りしたのは、私とH Y先輩だけです」

I Yが強めの口調で言うと、

「うむ…そうなるな」

「それでいいのですか？」

ここで、初めてHGはIYを見て

「…HYの事か？」

「はい」

IYの返事に、HGは天を仰いで

「あいつは、俺達を謀った…」

「…謀ったから許せないと？」

「違うな」

HGは再びIYを見る。

「？」

「謀ったのは、HY自身もだ…その決着をつけさせるために、俺はあれを両親の元に返したんだ」

「…」

IYはHGの言った言葉の意味が分からなかった。HGはまた天を仰ぎ

「あれは、新入社員の頃から、なんか影というか…暗い過去があるとは睨んで気にかけていたが、ようやく自身でその膿を出した…だったら、その勢いで両親を納得させてとつとこつちに帰って来いと送り出した」

HGの話にIYはハッとして

「(准尉はそこまで考えて…まるで、私の『赤ずきんちゃん作戦』の様に…(「巻き込まれ親父の撤退」参照)」

「俺とHYの付き合いは、ここに居る誰よりも長いんだ…この先あれがどうするかは、俺にはわかる」

「…そうでしたか…なんか羨ましいです」

「妬けるか？」

H GがI Yを見ると、I Yは嬉しそうに

「はい」

と返事をした。

●冬

H Yが実家に帰ってから、初めての冬が来た。

「冷えるなあ…。雲行きも怪しい…こりや、雪でも降るかね」

と、空を見上げて建物の狭い隙間から見えるどんよりとした雲を見上げて、独り言を言いながら、H Gはガンスミスの仕事が一区切りついたところで、一服すべく、裏の男屋の工場から表の白山亭に従業員口から入ろうとして、女給にさえぎられた。

「社長、何度言ったら解るんです？ここから先は、ジェントリの空間ですよ…そんな機械油のついたつなぎを着て入られては困ります…ましてや、あなたは当店の社長ですよ。風呂入って、着替えてきてください」

と追い返されてしまった。

「ああ、そうだったな…スマン。注意してくれてありがとう」

白山亭は、紳士淑女の社交場であると社長のH Gが自ら決めたことである。たとえ経営者でもその決まりを自ら破ることはできない。H Gは注意した従業員に謝ると母屋に向かった。

「今の社長でしょ？」

別の女給がH Gを追い返した女給の肩越しに母屋へ向かうH Gの後姿を見て言った。

「うん、工場での作業着のまま入ろうとしたから、追い返したの」

「そうね、こちら（白山亭）はこちらの品位を保たないとね…」

「でも、H Yさんが実家に帰ってから、ちよくちよくこれじゃあねえ…かなり落ち込んでいるのね」

「社長自らH Yさんの意思を尊重して実家に帰したそうだけど、あんなに社長を慕っていたし、社長も可愛がっていたから…」

H Gは風呂に入り、深いため息をつく…こんなとき、祖父が真心を込めて整備していたボイラーが未だに24時間お湯を沸かしてくれているのをありがたいと感じる。

身なりを整えパイプ等の喫煙具とパイプ煙草…あと新聞を携え、母屋から白山亭に入る。

「社長、いらっしやいませ」

さつき追いついた女給が声をかけた。

「君、タバコ休憩に入ったんじゃないの？」

「はい、そのつもりでしたが、社長が私の目を盗んであの格好のまままた来やしないかと、見張ってました」

「はは…それは、仕事熱心なことでも…関心、関心。この格好ではどうかね？」

H Gは女給に対しておどけてみせた。女給は笑顔で

「ハイ！今日は一段と紳士に見えますよ。さあ、こちらへ」

とH Gを店内に招き入れた。

「ありがとう」

H Gはいつもの表通りに面した白山亭の入り口近くの窓際のカウンター席に座ると、パイプにタバコを詰めだした。すかさず女給がコーヒーとおしぼりと使い捨ておしぼりの両方をテーブルに置く。使い捨ておしぼりはパイプタバコを詰めて汚れた手を拭くためのもの。

パイプにタバコを詰め、ライターで火をつけ、数服パイプを吹かしてから、タンパーでパ

イプの中のタバコを整え、再度ライターでタバコに火を着ける。深い一服を味わい、パイプの中のタバコの火の付きぐあいを見て「うむ」言って、コーヒーを一口飲むと新聞を広げた。新聞を読みながらパイプを咥えてタバコを燻らす。店内は、他に客がなく、暇を持て余した女給達のおしゃべりとBGMが流れる。白山亭のルールでは、女給・従業員同士での店内の会話は、節度を持った範囲ならよしとしている（HGが雑談の無い職場は駄目だと思っているため。作者注）。

パイプの中のタバコが3分の1になり、コーヒーカップのコーヒーが無くなった頃…気を利かせたフロアスタッフのTTが

「准尉…もう一杯いかがですか？」

と声をかけた。その声にHGは斜め後ろに立っているTTを見上げて、

「そうだね、いただくか…それから、今日はお客さんの入りが悪いようだが？」

と聞いた。TTは持ち前の笑顔を絶やさず、

「そうなんですよ。今日は朝から冷えるし、天気予報では大雪と言う予報も出ていますから…」

と言った。TTの言葉に改めて窓の外を見たHGは、自分のスマートフォンで天気予報を確認した。それによると、白山亭のある地区一帯は、大雪注意報が出ていてもう大雪が降っている事になっているが、まだ雪は降っていないようだった。

「大雪ねえ…交通機関はなんと言ってるかな？」

TTに確認するふうでも、独り言を言っているような感じでつぶやくと、スマートフォンで交通情報を確認する。交通情報では付近の交通機関の一部では間引き運転を始めているようだ…それ見てHGは「ナニ！」と言って、窓越しに視えるY国際港町駅とバス停の様子を見て

「TT、双眼鏡」

と言うと、T Tはバーカンターから双眼鏡を急いで持ってきた。H Gは渡された双眼鏡で駅構内の掲示板や運行状況を映しているサイネージモニタを確認すると、

「T T、今日のアルバイトと通勤の人は？」

「はい、私を含めて三人です」

とすかさず答えた。店内の女給は、H Gの弟子の他、T Tの様にパートやアルバイトを含めて常に3人居る体制で動いている。H GはT Tに双眼鏡を渡すと、T TもH Gと同じように双眼鏡で駅構内の掲示板や運行状況を映しているサイネージモニタを確認した。

「…そうか、いま駅構内の掲示では間引き運転が始まっているようだから、交通機関を使う通勤の人は返そう…近所の人は、雪が降ったらここは退避客で混雑するから、ひと踏ん張り願おうか、娘共（工場に居るI Yと母屋に住んでいて今日は非番T Y。I Aは店内に居る）に声をかけてくれ。K M（経理担当、彼女も帝都からの通い。作者注）には、私から言おう

…あと、コーヒーお代わり」

「はい、ありがとうございます」

と言うT Tも数駅離れた自宅から通勤していた。

T Tがカウンターに戻って、H Gの指示を伝えると、通勤の従業員は口々に「ありがとうございます」と言っていた。

H Gはスマートフォンで、母屋で経理をしているK Mに事の次第を話した。

次に工場のI Yに着替えて店に来るように伝え、最後にI Yに

「店（白山亭）に入る前に風呂に入るように！それからS Kにボイラーの調子を確認するよ
うに…大雪になるぞ！」

と、さつき言われたことを伝えているのを聞いた女給達の苦笑を誘った。

コーヒーのおかわりが運ばれてくる。「どうぞ」と言ってテーブルに置くT Tを見て「ありがとう」と言うH Gを他所に、窓の外を見たT Tが

「雪：降ってきました！」

と言った。HGもつられて窓の外を見ると、さっきまで降っていなかった雪が本降りの状態になっていた。

「うわ！すごい雪だね」

とHGが言うと、店の奥やカウンターに居た女給や従業員たちがHGの居る席に押し寄せてきた。そして口々に「電車まだ大丈夫かな？」「どうりで寒いわけね」などと口々に言つて、窓の外を静かに降り、積もり始めたドカ雪を見ていた。

●…ユキ！

その頃、Y国際港町駅に一人の女性が大きなキャリーカートを引いて降り立った。彼女は駅の出口から視えるドカ雪を見て

「うわー、ここまで来て…」

と言った。そしてすでに数センチ積もった雪の中に一步を踏み出した。

いつもなら、ほんの数分で目的の白山亭に着くはずが、降りしきる雪にカートのタイヤが雪に取られて引きずるを得ない状況になり、前進に難儀していた。

白山亭内と裏の母屋では帰る人（近所の病院や警察署に勤め居てる人は仕事場に行く）と残る人、それから母屋から女給姿のTYが店内に入る等、バタバタとしていた。

HGは、テーブルに着いたまま外を見ていた。

「では社長、私たちは帰ります」

とTTが帰宅（病院出勤）組を代表してテーブル脇に来たのを見て、

「気を付けてお帰り」

と言って、ふと窓の外を見て

「…ユキ！」

と驚いたように言った。周りは「何を今更…」と思ったが、T Tは反応して「どこです？」

と言った。H Gが指さす方向を見て、T Tは口を手で覆った。そこには実家に帰ったH Yが重そうにキャリーカートを引きずっているのが降りしきる雪の合間から見えた。

「H Y！」

とT Tが叫んだ。H Gは席を立つとドアから駆け出した。そのあとを追って、T Tが出て行った。丁度男屋の工場から風呂に入って女給姿に着替えたI Yがいつもの様に「I Y入りまーす」とバーカウンター横の通用口のドアを開け、スカートの端を軽くつまんで会釈をして入ってきて、慌てて出ていくT Tを見て訳も分からず追いかけて行った。残りの人達はただ茫然としていた。

H Yは駅前ロータリー沿いに白山亭からおよそ20 m手前のところで、雪にキャリーカートのキャスターがとられ立ち往生しそうになっていた。キャリーカートの方を向いて引っ張るH Yの背中から、自分の名前を呼ぶ声を聞き、振り返ると、その方向には、H Gを先頭にT T、その後ろにI Yが向かってくるのを確認した。

一方、訳も分からずT Tの後を追いかけたI Yも、H Yの姿を認識した。

そして、3人がH Yの前で立ち止まると、H Yは

「えへへ…帰ってきちゃいました」

と、照れながら言った。

「そうか…、ご実家は？」

「なんとか説得しました。それでやっと認めてくれました」

H Yは親指を立てて言う。

「そうか…おかえり」「H Y先輩お帰りなさい」「おかえりなさい、H Y」

「うん」

とHYは笑顔になり、HGとIYに思わず抱き着いた。その後ろでTTは静かに微笑んでいた。

「さあさ、雪が酷い。とにかく白山亭に入ろう…詳しい話はそれからだ」

と言って、HGはHYが引きずっていたキャリーカートの取っ手を持ち、カートごと持ち上げた。

●総員戦闘配置！

白山亭の入り口から事の始終を見ていた女給達は拍手して4人を迎えた。

白山亭に入ると、HGは、

「アテンション！（傾注！）」

とつい昔の癖で言った。白山亭のフロア内には既にボイラーマンのSKを除いて主な人が集まっていた。その中で、TT・HY・TY・IY・IAは以前民兵会社に勤めていたので自然に直立不動になった。

「諸君！実家に帰っていたHYが返ってきた。本来なら店を閉めてお祝いでもしたいところだが、生憎の大雪だ！交通機関が止まらない内に帰宅や勤め先（警察署・病院）に行くものはすぐに動きたまえ！！そして、残ったものはこれから止まるであろう交通機関に立ち往生するお客様を暖かく迎える準備を始めてくれ！HYのお祝いは後日やろう！！」

HGは演説ぶった。

「ハイ！！」

みんな一斉に返事をする、各々動き出す。その中でTTはHYの肩を叩き、

「HY…よかったわね…私は、今日は帰らなきゃならないけど、今度お話ししてね」

「うん…TTまたね」

HYはTTと笑顔で挨拶していた。HGはHYに対して

「寒かったろう…とりあえず、風呂にでも入って一息入れな」

「はい、准尉」

H GはH Yのキャリーカートをもって、母屋に向かった。

母屋に向かう途中でH Gは

「お前さんの残していったものは、一応そのままにしている。また引き続き使えるよ」

「…ありがとうございます」

「まあ、なにはともあれ、お帰り」

「改めて、ただいまです」

と言って、お互い笑いあった。

H Yを母屋に連れて行き、H Yのキャリーカートを玄関に置くと、H Gは自ら陣頭指揮を執るべく自室に入り、フロアスタッフの制服に着替え、店に引き返した。店内は、夜の営業ではなく、今晚は引き続き昼間のカフェ営業をすべく、I AとT Yが地下の倉庫から食料をあげたり、厨房ではS Yが暖かい料理の仕込みを始めていた。またアルバイトの女給達はその姿のまま外の雪かきをしていた。その中にI Yがいて指揮をしながら自らもスコップを奮っていた。

H Gは厨房に行き、シェフ長のS Yに

「暖かい汁物…できればシチューとかがいいのだが…できる?」

「社長…待ってました!今夜は冷えると思って、ビーフシチューを朝から仕込んでいました!」

「それは、よく気が付いた。ありがとう!」

「ただ…」

「ただ?」

「大雪で早めに閉店するかもしれないと思ったので、量が…下手すると売り切れるかも…」
「それでもいいよ。なくなったら、みそ汁でも振る舞おう。食材の不足はないかね？」

「それは、大丈夫です。みそ汁ではなくて、豚汁が作れますよ(笑)。却って、バーカウンターのドリンクが心配です」

「成程…見てくる。どうもありがとう」

と、H Gは去り際に思い出して

「ところで、シェフは子供の迎えに行かなくて大丈夫？今夜は母屋に子供と泊ってもいいよ」

彼女は近所に住んでいて、母子家庭である。

「はい、ご心配頂きましてありがとうございます。これから迎えに行きまして、今夜はお言葉に甘えさせていただきます」

S Yの子供は保育園の後、白山亭の母屋で預かり、そこにいる休憩中の女給やK M達に面倒を見て貰っている。

H Gは厨房にいるセカンドシェフのS Hに対しても、

「帰らなくても大丈夫？」

「…はい、もうじきS Mが来るので、彼女と交代したら帰らせていただきます」

「でも、雪の降りが激しいし…」

「えっ？ヤダーどうしましょ！」

慌てるS HにS Yが

「S H、先帰っていいわよ」

「ごめーん、S Y…じゃ帰らせてもらうわ」

「うん、気を付けてねー、あとS Mに早く来るように伝えて」

「うん、じゃあ」

H Gはバーカウンターに入ってこちらでも買い出しの必要がないことを確認して店を見回した。店内は、数人の客が入り始めていた。

「だれか」

「はい」

H Gの前に来たのは、T Yだった。H GはT Yに対して

「特命！お前はトランシーバーを持って駅に行き、交通機関運行状況を逐一報告。寒いから暖かい格好でね…ついでに客引きもしてくれと助かる。交代要員は用意する」

「了解！」

と言って、T Yはニコリと笑って敬礼した。

「次、誰か」

「ハイッ」

また一人の女給がH Gの前に立つ。彼女は白山亭のアルバイトでH Mと同じ港町総合病院の看護師…今日は、病院勤務は休み。H Gは彼女に対して、

「君は、上（2階）のP Cを使って、交通情報と天気状況を観測し、また、駅から送られてくる状況を館内放送で伝える事…帰れないようなら、母屋に泊まってもいいよ」

「畏まりました。今夜は泊まらせていただきます！」

と言って、軽く頭を下げると2階に向かった。

やがて、H Yがフロアスタッフ姿で白山亭に入ってきた。この時点で白山亭のフロアには、総勢6名程残って居た。

…白山亭のフロアスタッフは、H GとT T以外にH YとI Yが居ます。フロアスタッフは女給達の統括とコーヒーを淹れる技量を持った人です。作者注。

「うーん、人が足りんな」

入り始めた客の接待をする女給の人数を確認しながらH GはH Yを呼び

「疲れてない？」

と訊ねた。H YはH Gの気遣いを嬉しく思っ

「大丈夫です。こんな時ですから」

「すまん、お前さんには早速帰宅したT Tの代わりをしよう。できるね」

「任せてください」

「この雪では交通機関が回復するまで時間がかかるだろう…今夜は夜通しで営業するから、明日まで2交代制にする。いま残っている人員を2班に分けて、1班は夜勤のため母屋の3階で仮眠を取る…交代は6時間おき…すぐに初めて」

「ハイ！」

次にH GはI Yを呼んだ。

「はい、准尉何ですか？」

「これから、朝まで2交代制にする。今H Yに指示をしたから、1班をお前に預ける。H Yとよく話し合って。それから、お前さんもフロアスタッフの制服に着替えて」

「はい」

「あと、S Kに伝言。『ボイラーをいつもより注意してくれ…壊れたりしたら凍え死ぬ』と」

「はい(笑)」

次にH GはI Aを呼んだ。

「はい」

「今、人の割り振りを2交代制にして、H Yに割り振りを任せた。また、I YにS Kに対して伝言を依頼するとともに、1班を任せた。お前は今店内に人が足りないので、H Yが戻っ

てくるまで、フロアのアルバイト達の指揮をとれ」

「ハイ」

●思わぬ援軍

雪が激しく降り続き、短時間でこの辺では珍しく足の踝の上まで積もった。電車が完全に止まったので、HGはTYに戻って来るように指示した。

TYが白山亭に戻ってくる際、10数人の女性を連れていた。HGが見たことがある顔だなあ…と思ったら、いつも白山亭を手伝ってくれている港町警察署と港町水上警察署の女性警官達だった。

「やあ、皆さんどうしましたか？」

HGは彼女達が白山亭の従業員ではないし、ましてや碇屋のエージェントでもないのので、丁寧な応対をする。

「ここにいる私達は、この雪で電車が止まり、隣の駅の官舎に帰れなくなりました。それでお願いがあるのですが」

「何でしょう？」

「今夜一晩泊めていただけませんか？その間、無給でいいので、ここで働きますから…但し、これから夜勤の人も居るので、その間は本来の勤務に就きますので、お手伝いできませんが」

HGは、いつも彼女らが母屋で夜勤前の仮眠とか、夜勤明けの仮眠や入浴をしているのを許している。そのお礼に彼女らは白山亭でアルバイトで働いてくれている事に感謝こそすれ、拒絶する気は毛頭なかった。

「ええ…どうぞ、当店も今夜は徹夜で営業するつもりですので、人手に少々困っていたところですよ。こちらからもお願いします」

とHGが返事すると、彼女達は手を取り合って喜んだ。

「ちなみにですが…」

「はい、何でしょうか？」

「あなた方の中にこれから夜勤に就く方は？」

「はい、私と彼女」

「えーと」

「あつ、港町警察署です」

「それでは、港町水上警察署の方でこれから夜勤の方は？」

「私です」

「あと、早番の方は？」

「わたしと彼女です」

H Gは、顎に手をやり暫く考えて、

「T Y」

「はい」

「ここに居る人達の名簿と勤務チャートを作成してくれないか？」

「はい！すみませんが2階に来ていただきませんか？」

「はい」

T Yは女性警察官達を連れて2階に上がった。

H Gはまた考え事をして、I AにH Yを呼んでくるよう依頼した。

「何でしょうか？准尉」

息を切らしてH Yが訊ねる。

「申し訳ないが、援軍が来た…兵力の逐次投入は最も避けたいとこだが、2交代制にしたの

で、反対に猫の手を借りたい程だと思うがどうか？」

「そうですね…何人増えましたか？」

H Yは考える仕草をして、H Gに質問する。

「10数人だ。援軍は警察署の女性警官…みなここでのフロア経験がある。但し、その内何人かは夜勤や早番で署に行くので、その分戦力ダウンになる…今2階でT Yが勤務チャートを作成している」

「はい、了解しました…そうですね、その戦力は貴重ですね。T Yが作ってくる勤務チャート次第ですが、考えようによっては、3交代の可能性も…」

「2階に居るT Yとコミュニケーションを取ってくれ。頼めるかな？」

「はい！」

H Yがリーダーとして、経験が積めるとH Gは考え見守る事にした。

●伝説の不夜城

駅前の洋食店のシェフ兼オーナーが雪の降りが激しくなってきたので、店を早じまいすべくシャッターを閉じようとした手が止まる。

「…どうしたの？お前さん」

オーナーの妻が心配して出てきた。

「アレを見な！」

オーナーが指差す方には雪化粧した白山亭の建物が普段より光を増している様に煌々としていた。

「あら…綺麗！」

「…伝説の『不夜城 白山亭』だ…」

「『伝説』って…大袈裟な。雪明りに照らされているだけじゃない！」

「そーじゃないんだ」

「？」

「雪の晩の白山亭は道に迷った者、行く先が無い者を暖かくもてなす店になるんだ…お袋に聞いたことがあるが、先代のミルクホール白山亭のオーナー…今のHGの婆さんのHMさんの事だが…後の旦那さんになるHHさんと出会ったのは、行き先を失ったHHさんが今日のような大雪の中で駅前についでいた所を当時の先々代オーナーINさんの末娘でまだ女子高生のIMさん…後のHMさんに拾われて白山亭に転がり込んだそうだ」

「…なんかロマンチックね」

「だろ？HGの奴、その事知ってるのかな…？でも、奴も今夜は不夜城にする様だから、血は争えん」

「さてと…白山亭が伝説の不夜城になるのなら、俺もあそこの一族の者だから、なにか手伝わんとな…」

「あんた…」

「店は閉めていいぞ！あそこは最近腕のいいシェフを雇ったから、俺の手は必要ないが、食材とかは援助ができる…ほら、見ろよ。『洋菓子屋』の奴も残ったケーキの箱抱えて歩いてるぜ」

「あら…ホント」

白山亭入り口…

「おい、HG！食材足りるか？新鮮なの持って来たぜ！」

「あつ、『八百屋』の…（この町はHGの曾祖母の子孫たちが多くて、一々名前で呼ばないで、皆屋号で呼んでいます。…ちなみにHGは『白山亭』です。作者注）」

「おい、魚余ってんの持って来たぜ、タダでいいぞ！」

「〃魚屋〃の…ありがとうございます」

「俺のは…タダとは言えんな…お酒には税金がかかっているから…」

「ハハ」

この大雪の中、自分の店は閉めたものの、白山亭が徹夜営業をするのを見た商店街の人は、自分の店の食材を持ってやってきた。

「皆さん、ありがとうございます」

「なあに…お前のひい婆さんや、婆さんはこうして雪で振り込められた人を助けてきたんだ…街の衆としても、ひい婆さんの子孫としても協力しないとな」

「皆さん…ありがとうございます」

H Gは何度も頭を下げる。「ありがたい…これもひいおばあさん、おばあさん達が築いた縁のお陰…本当にありがたい」

その中に、割って入る人物が居た。

「あつ、白山亭さん…営業してるの？」

「これは、駅長さん…はい、この通り」

H GがY国際港駅の駅長の質問に、店内でお客をもてなしている女給達を手で示すと、駅長は安堵の表情をして、

「良かった、至急出前頼める？保線要員とウチの駅員達にコーヒーとサンドウィッチを…80人前…多いかね？」

駅長は困った顔で言うと、H Gも注文数が多いので、

「はい、サンドウィッチは時間がかかりますが…」

と言うと、その場に居た飲食店の店主達が

「だったら、ウチの店も手伝うよ」

駅前のパン屋のオーナーが手を挙げた。

「ウチもあのレシピ持つてるから手伝えるな」

「ウチも手伝うよ」

喫茶店のオーナーと洋食屋のオーナーも手をあげる。

「「さあ、H G 采配してくれ」」

と言われたH Gは

「現在の白山亭サンドウィッチの在庫は…レジ横のは…ひい、ふう、みい…17箱。I A、後の在庫は？」

「厨房に約20箱あります！」

「今夜は徹夜営業だし、店のみんなの夜食も居るから…ざつとあと120人前作ればいいかな？」

とH Gは言って、

「白山亭サンドウィッチを120人前作りましょう。では、パン屋さん、パンを焼いてカットをお願いします」

「ほいきた」

「喫茶店さんと洋食屋さんは、食材の加工をお願いします。喫茶店さんは卵サンドの具材、ポテトサラダサンドの具材。洋食屋さんは野菜サンドの具材とハムカツサンドの具材をお願いしますか？」

…白山亭サンドウィッチは、卵サンド、ポテトサラダサンド、野菜サンド、ハムカツサンドの4種です。作者注

「いいぜ」「まかせな」

と言って、手を挙げたオーナーは自分の店に戻った。

雪の降りしきる夜、白山亭は帰れなくなった人の拠り所として大忙しです。

●エピソード

翌朝、例年になく脛の中程まで積もった庭を母屋の縁側から眺めながら、白山亭で徹夜営業をしたHGはパイプを燻らす…その後ろにはいつも通りにHYが控える。

「ひどく積もったな…」

「そうですね…もつと着込まないと風邪をひきますよ」

と言って、HYはHGに毛布を掛ける。

「ありがとうよ…HY。それから、昨日の晩から今朝まで大変だったな…お前さんが帰ってくれて助かったよ！ありがとうHY」

「ハイ」

「ところで、親御さんは納得してくれたんだよね…？」

「なんですか！ちゃんと話をして了解を得てきました…そんなに信用できませんか？」

HYが怒って言うと、

「…いや、そう言う訳ではないが…」

HGは困り顔で答えた。

「…まあ、今までのわたしの所業からすれば、疑われて当然ですけど…」
と言って、HYは俯いた。

「じゃ、HY…報告しろ！」

HGの言葉にHYは身を正して、

「はい、実家に帰って義父、母、義兄の4人で話し合いをしました…流石に内容が内容です

ので、義姉は入れませんでした」

「うむ」

「話の口火をわたしが切る前に、母が始めてしまい…その收拾に時間を取られました…」

「ほーお、お母さんが…」

「母はかなり感情的になっていました…逆に私が母を慰めた位でした」

「うむ」

「自分達のした事を母から暴露され…本当は私が言う話なのですが…本人達（H Yの義父と義兄）は、深く反省し、世間体と義姉とその子供の手前、謝罪を得ました」

「…それでお前さんは、許したのかね？」

「そんな訳ないでしょ！」

とH Yは憤慨した。

「…だよな」

「はい」

「で？」

「はい…この件について、義父と母は離婚をすることになりました…口外しない事を証文に綴り、慰謝料を貰う事になりました…但し分割払いですが…(笑)」

と言って、H Yは寂しく笑う。

「で、お母さんは？」

「K府領地にある母の実家には二人暮らしの祖父母が居ますから…そちらに行く事になりました。その為の手続きや引っ越しで帰ってくるのに時間がかかりました」

「お前さんは？」

「はい、あの義父と義兄と縁を切りましたので、母の許しを得ました。母は私が准尉の所に帰るのを許してくれました」

「姓は？」

「はい…実は、私の母もあの義父も同じ “H” 姓なんです…なので私は今まで通り、H Yのままです」

「そうか…」

「以上で、報告を終わります。准尉殿！」

と言って、H Gは座ったままH Gに敬礼した。H Gはそれに対して答礼し、

「報告ご苦労」

と言った。

「H Y」

「はい、なんですか？」

「そういえば、お前さんの引越は？」

「ハイ、今度は荷造りして送りましたよ…でも、この大雪で遅れるかもしれません」

「…そうだな」

H Gは、ため息をつくど、

「さて…お前さんの歓迎会でしょうか？」

「あれえ…歓迎会ですか？わたしは、ここに帰って来たのです。歓迎されたら困ります」

H Yはおどけて言う。

「…そうだったな。お帰りH Y」

「えへへ、恥ずかしながらただいま帰りました」

H YはふざけてH Gに敬礼する。

「ホントに寒いな…お前は大丈夫か？」

「寒いです」

「…だよな、フェリー埠頭の時（「巻き込まれ親父の突入」参照）も凍えていたな」

「はい」

「HY…入るか？」

と言って、HGは被っている毛布を持ち上げる。

「ハイ！」

と言って、素早く潜り込むHY。

その光景を居間の襖の隙から覗き見ていたIY。

「いいなー」

「オーイHGー、雪が酷くてうごけーん」

男屋からSKの叫び声が聞こえた。

「おー分かった。いま救出する」

「頼むわ——」

と言ったSKはHGとHYを見て、

「おー、済まねえな…お取り込み中で…」

と言われて、HYは赤くなった。

「うるせー」

とHGが言い返すと、SKが

「俺はてつきりお前が猫を抱いていると思ったんでなー」

その言葉にむくれるが「ニャー」と言って笑って、HGに擦り寄るHY…